

授業としての「英文法」から「英語学」、英語学へ — 類義語からの一考察 —

No More Independent ENGLISH GRAMMAR, No More Independent
ENGLISH LINGUISTICS:
Finding a bridge over these two courses and more

山 崎 英 一
Eiichi YAMASAKI

キーワード：学問と教育・学修、英語学、英文法、科目間連携

1. はじめに

昨今授業への学問的見地の積極的な導入の必要性が増している。その一方で、同系統の学問の授業間でも必ずしも連絡（連携、連続）が付きやすいとは限らない。本論稿は学問としての英語学とは同系統ではあるが、必ずしもつながりを感じられるとはいいがたい、授業としての「英文法」に関し、学問としての英語学の知見の下でこれを考え、もって授業としての「英語学」や更にそれ以降との連携を検討するものである。¹⁾

英語学専門の学科ではともかくとして、通常「英文法」「英語学」更には学問としての英語学がそれぞれ分断されている傾向にあるのは前二授業を担当したことのある教員であれば実感としてであろう。具体的には例えば「英文法」の際に英語史に触れることはほとんどない。Chomsky系の統語論に触れるならば、教育・学習としての「英文法」というよりは専門課程での学問としての「英文法」とする覚悟があるであろう。また「英語学」（特に概論系）においても、英語史や統語論等を、最先端の知見まで扱おうとするならば、全講義回数（例えば15回）での消費コマ数の配分やその効果に頭を悩ませるであろう。現実的には最先端の断片的紹介程度で授業が終わるのではないだろうか。

更に、「英文法」「英語学」の両授業担当者（あるいは他授業との連携を図る教師）にとって、両者の相関は言うに及ばず、「英文法」から「英語学」への発展、逆に「英文法」時の知見を想起させるような「英語学」の展開が難しいことも課題であると思われる。例えば、上記のように、「英文法」では英語史に触れないにも関わらず、通例「英語学」（概論系）ではほぼ最初に大々的に扱う項目であり、両授業がまったく異なる物であるとの印象を持つ学生も多いと思われる。また、例えば、Chomsky派に代表される現代の統語論の紹介は（専門の授業でもない限り）かなり困難であり、これと「英文法」での文法説明や体系とを最初から関連づけて考えられる学生は極わずかであろう。「英文法」が学修・練習の側面を重視し、「英語学」が抽象的考察面を重視する傾向にあることから、極端に言えば、両者はまったくの別物であったのである。

これらのことは、「英文法」で扱う記述文法がJespersenの頃までには整っており、学問の最先端とはおよそ7,80年も時間を隔てていることにもより、その間の学問の進展を考えるならばやむを得ない面もある。

しかしながら、本論稿ではこのような状況の打破のヒントを考える。学問的知見を「英文法」や「英語学」（や望むらくは英語学系ゼミも視野に）へ反映させ、かつ「英文法」と「英語学」間に連続性・発展性が図れる一例の提示を意図する。具体的には、Kjellmer (1989)（以下時にK）に基づき、いわゆる「同義語・類義語」の例から*even if*と*even though*を用いた構文例を取り上げる。²⁾

2. 「英文法」での問題

本論稿で取り上げる*even if*の文と*even though*の文に関し、Kjellmer (1989) では両構文が相互に置き換え可能、つまり同義の例を挙げている。

- (1) a. Even if verbally he is politeness itself, such a...
 b. ...delighted in finding things out for ourselves even though our frequent questioning must have seemed....³⁾

(1a, b) はKがJespersen (1940: *A Modern English Grammar on Historical Principles*) から引用したものであり、更には当時のOEDに出典を求めるものである。(1a) での*if*の代わりに*though*を、(1b) の*though*の代わりに*if*を用いても、実質的な違いはないという。

このように同義のように見える例があり、それ故KによるとJespersen (1940) をはじめ従来は、両者同義表現であると捉えることが多かったようである。

一方、同義とは言いがたい例もあるとしてKはBritish LOB CorpusやAmerican Brown Corpus等、コンピュータコーパスを利用して例を挙げている：

- (2) a. What does he mean by trying to come home now, even if he did promise?⁴⁾ (LOB)
 b. She found this immensely comforting, even though Mercer did not make much sense out of it. (Brown)

Kによると(2a) の*if*は*though*に置き換えられず、(2b) の*though*は*if*に置き換えがきかない。簡潔にまとめるとこれらの例は両構文が同義でないことを示している。

以上のように、時に同義で、時に異なる。あるいはある専門書、辞書や参考書では同義扱い、別の書では異義扱い、ということになり、実態がわからない。前者の観点からはいつ同義（あるいは異義）なのか、後者の観点からは書のどちらが間違いであるのか、という疑念が生じよう。

このような状況に対し、従来の「英文法」でのもっとも安易な説明としては「両構文での問題の表現*even if*と*even though*は熟語であり、意味が似ている面では同義であり、意味がずれて

いる場合は両者の異なり of the せいである」というようなものが考えられる。「熟語として特殊なのだから異なることもある」という印象でその場をとりあえずやりすごす方便にはなりそうであるが、冷静に考えれば実際にはこれは何も説明していない（むしろ間違いである）。次にありそうな対応が「両構文は類義語であり完全な同義語の例ではないので、同じように使えることもあればそうでないこともある」となろう。これは対応としては（誤りが無い分）ましではあるだろうが、いつ同じようになるのか、という問いが残り、実際に使える英語の指導が求められる昨今ではまだ問題が残ろう。

3. Kjellmer (1989) と「英文法」

以下本節ではKjellmer (1989) を基に、授業としての「英文法」での展開を考える。論文としては古いが、以下にわかるように、説明力自体は現在でも通じるものであり、また、調整することでさまざまな適用が考えられるからである。以下本節ではKの考えを、授業への適用という観点から、多少とも本論考執筆者の属する語用論的捉え方に変換して紹介を行う。⁵⁾ これは、Kの主張を厳密に捉えるのではなく、多少とも緩用するということであるが、語用論的概念「文脈」「行間の意味」等は比較的直感的に扱え、受講学生の心理的抵抗を下げられることを優先してのものである。⁶⁾ なお「英文法」をはじめ、授業での適用時には、学生に応じてより詳しい説明を心がけると共に、例文数も増やす必要があることを記しておく。

3.1. Kjellmer (1989) および本論考での基本的立ち位置

まずKの基本的主張をおさえておく。Kは、問題の両構文は熟語ではなく、故に*if*と*though*の意義の違いから、両構文全体の意義も異なるとする。両者の、時に見せる同義性は、語用論的に言うところの「文脈上の情報」と組み合わせることで*even if*が*even though*の意味をあらわしている様に見えるとするものであり、本論稿執筆者も基本的にこの立場である（ただし、逆の、文脈上の情報により*even though*が*even if*の意味に見えたりするという点での説明には疑念がある）。K自身の例を元にするると以下のようなようになる：

- (3) a. I'll go for a swim even though the water is freezing.
 b. I'll go for a swim even if the water is freezing.
 c. I'd go for a swim even if the water were freezing. Kjellmer (1989)

(3a) は、*even though*を用いた文であり、他の譲歩文 (*although*の文) と同様、*though*節が真であることを示す。簡便に記すと、従節が [+T] 指定されていると言えよう。

(3b) は*even if*を用いた条件文であり、譲歩条件文である。Kも本執筆者も問題の構文群は（コロケーションの性質は強くとも）熟語ではないと考え、故に部分の総和が全体の意義であるとの立場である。故に、通常の条件文時と同様、*if*節の真性は指定されていない（故に条件文なのである）。あえて言うならば真性に関するスロットがΦ（空）のままということになる。

特性が空であることから (3c) にあるように他の形態（この場合、いわゆる仮定法使用）を

追加することで、[-T] つまり、*if*節の導く情報が真ではない（反実仮想）であると指定することができる。

なお、ちなみに譲歩文、譲歩条件文、仮定法使用の譲歩条件文の三種いずれも一般に主節が真であることを伝えるが、この特性に関しては本稿では扱わない（ただし例えば山崎（1991）参照のこと）。

Kの主張を簡易にまとめると、文脈上（他の言語表現や状況からの）従属節の情報をΦ（空）にする状況が*even though*文が*even if*文と同義に見える事態ということになり（下記3.3）、逆に*even if*文での従属節の真に関する特性スロットが文脈上 [+T] と判断されれば、実質的に*even though*文と同義になる（3.2）ことになる。発想としては次の例の平行性の議論と同様であろう：

- (4) a. (言語的ないし状況的に雨が降っている、つまりIt is raining.が真として成立することが知られている場面で) If it is raining, the game will be canceled.
 b. Since it is raining, the game will be canceled.

以上のように、K（及び本論考）での立場は問題の構文が互いに異義であることを出発点としている。以降、特に同義と見える場合に関して、「英文法」で教授すべきかどうかも含め検討しよう。

3.2. Kjellmer (1989) に見る、*even if*文の、*even though*文への接近

上記（1a）に見られるように、文脈次第では*if*節の内容が真であると会話参与者に判断され、トータルの*even though*文と同じ情報群となる。このような、文脈（状況）上の情報で解釈が影響を受けるというのは、専門レベルの語用論に触れる前の学生や「英文法」受講者にも充分理解できることであると考えられる。つまり情報の上乘せ（意味の加算）は日常でも経験があるとわれ、比較的理解させるのは簡単と思われる。

3.1に加え、ここでの、状況次第で時に同義となるという点をきちんと指導できれば、前節であげた、「同義なのか異義なのか」という問いに学生自身が答えられると共に、「熟語として例外的、説明不能な現象」とする必要がないことにも思い至らせることが可能であろう。

以下（特に3.5の（5））でも述べるように、「英文法」の段階での提示は3.1と3.2の項目（3.5にまとめる）どまりで充分で、かつ最も適切と考えられる。

3.3. Kjellmer (1989) に見る、*even though*文の、*even if*文への接近

これは、*even though*文の、文脈上の情報を含めた総合的意味が実質的に*even if*文のそれとなる状況ということになる。上記の説明を使えば、他の情報により [+T] が未指定のΦになるということになる。この状況・事例は、「英語学」以降では扱う価値があると思われるが、「英文法」ではあえて省略することが望ましいと考えられる。これは主に次の二つの理由による。まず、通常一般的に、語数が増えたり、文脈情報があれば、その文の意味の総和は増える。いわば、意味の「総和」という記述法が示唆するように、語群の意味、状況の意味は足し算的に

増える。つまり、既に「+」の特性があるのにそれを文脈情報で「-」に変更したりすることは（ありえないとは言えないにしても）想定しにくいのである。キャンセルされやすいとされる行間の意味を含む例ではなく、一般にキャンセルできないとされる語同士の例で考えるとびんとしやすいが、「おじいさん」に「女の」を加え（つまり「女のおじいさん」）でも、矛盾（ないし比喩的意味）となるのが通常で、「おばあさん」の意味にはなりにくい。つまり（Φを埋めることは上乘せなので可能だが、既に埋まっている特性である）[+male]を[-male]に変えられないのである。⁷⁾

また、二つ目の、より深刻と考えられる理由としては、本事例を紹介することで、学生が「結局*even if*と*even though*の文は同義で使えるのだ」と（間違った）把握・要約をしてしまい、そもそも両者は異なるというスタンスと間逆の理解となりうることが挙げられる。本3.3で扱う逆方向の事例は、（仮に導入するとしても、例外等を扱いやすい）「英語学」以降まで紹介を我慢するのが指導上有益であろう。

3.4. Kjellmer (1989) での英語・米語の扱いと、「英文法」で扱う危険性

Kはデータを、研究書等からだけでなく、当時はやりだしたコンピュータ・コーパスを利用して収集している。その中で両構文は英語・米語で動きに差があることも提示している。この点も以下に示唆するように「英語学」以降で詳細に検討する価値はあるのだが、「英文法」の段階で不用意に英語・米語での差異に触れるのは危険と考えられる。「英文法」の次の段階である「英語学」の段階ですら、「英語と対比的に米語が扱われる以上、両言語はまったく（あるいはかなりの程度まで）別物で、故に英国人と米国人とはコミュニケーションを図れない」と主張する学生が現実にいるからである（無視できない程度にはおり、「英米人の間でコミュニケーションが成立するか否か」で学生同士の議論が成立するくらいである）。

3.5. 「英文法」とその先へ

まとめると、上記のように、「英文法」での展開としては、3.3と3.4以前の、3.1と3.2の内容を時間に応じて提供するというで充分と考えられる。つまり、次のようにまとめられよう：

- (5) 問題の*even if*文と*even though*文とは足し算的に導出できる意味の複合体であり、前者は譲歩条件文、後者は譲歩文であるのが基本である。つまり、成分としての*if*と*though*の違いから、両構文は異なる意味であり、通常前者は真に関する値の指定がない（か仮定法時には[-T]）、後者は[+T]である。ただし（言語表現を含め）文脈上*if*節にある情報の真性が強く示唆される場合には*even if*文は総合的な意味として譲歩文となり、*even though*文と実質的に同じことになる。

このような「英文法」の説明に、直感的に使えるとは言え語用論的概念を導入していることから、この段階で既に従来の「英文法」から先へと足を踏み出していることは理解できよう。

このような「英文法 + a」をきちんと修得させることで、次節にみる「英語学」への連続性・発展性が担保できると思われる。

また、以上の説明を講義形式で行うことも可能だが、効果的な修得を図るのであれば、昨今要請の高まっているワーキングチームでのアクティブ・ラーニング形式利用が良いであろう。例えば、両構文に関し、授業前にホームワークとして各自に「同義と主張する出典とそこでの説明」および「区別して扱う出典とそこでの説明」を収集させておき、授業時のチーム内でその情報の交換と協議を行わせるという形態が考えられる。これにより、両構文で何が争点となっているかを自分達自らに自覚させるのである（最低でも書物によって記述が異なり、どれか一つをシンプルに受け止めるのは間違いであると気づけよう）。この協議の後で教員の誘導の下で説明・考察を進めることで、より深い理解が期待できよう。余談ではあるが、情報収集や議論の際、意見交換のためにチームメンバーを途中で交換する等で、例えば大阪府の教員採用試験に求められる「知らない面子の中でも協働できる」能力の育成にも役立てられよう。

以上Kを踏まえ、「英文法」の時間での適用を考えた。次節では、より積極的に英語学的展開を考察し、もって「英語学」でのテーマへの昇華を図る。

4. 「英語学」での考察

以上、「同義語・類似語」の一例として*even if*と*even though*の両構文の類犠牲を取り上げた。先行研究に基づいた、「英文法」への適用時の調整は主に語用論の枠組みから行った。これは比較的専門用語の規定・導入が不要であることからのわかりやすさもあるが、「英文法」の時間に両構文の意味・違いに関する基礎を確立することで、「英語学」（ないし英語学系ゼミ）の時間に更に発展（より深い理解、代替案検討等）を目指すことができ、従来断層化していた両授業間に連続性を持たせることができる。

具体的な展開に関してであるが、「英語学」が講義中心の授業であるなら、発展は上記3.3（以降）の知見を教示するにとどめざるを得ないかもしれない。が、（教員の適切な誘導の下で）アクティブ・ラーニング的に学生達自身に探求・思索させることで、例えば、授業におけるチームワーキングの際、班により異なる立場からの再検討を促したり、発表テーマ例として各自での考察を促したりできると思われる。以下では、この、アクティブ・ラーニング的展開を念頭に、列挙の形ではあるが、班ごとに異なる観点から検討を進める方略を多少具体的に検討したい。なお、英語学での各種理論枠等、典型的な立場に関しては特に説明なしに導入しているので留意願いたい：

(6) 再検討のためのスタンス例：

a. 語用論（「英文法」来のスタンス）：両構文は異なるとする。両構文の意味の違いを最小（実質*if*と*though*との違い）に捕らえ、文全体の意味を合成論的に組み上げると共に、広い意味での文脈情報（状況の意味）により実質的に同義となる。この立場を再度検証し、他の立場からの反論に備える。

a'. 語用論だがパラメーターを変える：aの立場における下位の特性のいずれかを変更して修正案を考える。例えば*even if*と*even though*とはコロケーション的つながりではなくやはり熟語であるとし、それに応じて他所を調整するとともに更なる説明力を目指す。

a". K説の実用性を検討する：Kでの「*if*節の真性を強く示唆する表現」（本論稿的には「(言語表現を含めた)文脈的に*if*節の真性を担保する情報」）が重要であったが、直感的にわかりにくいことが多い。その点を吟味し、修正を図ると共に、具体的な同定方法を考える。

a". 語用論的な対案：やはり語用論の範囲内だが、大幅に変更し、代替案として検討する。例えば、関連性理論的に、両構文は概念的意味では同義（あるいは逆に異義）だが、処理的意味で異なる（あるいは同義となる）。

b. 認知意味論：語義（文字通りの意味）を極限定し、語用論的（文脈的）に+*a*的な情報を考える傾向の強い語用論（特にCarston (2002) やAtlas (2005) 参照）に対し、意義を比較的に詳細に「図示」する認知意味論的観点をを用いる。両構文の意義を詳細に記述し、両構文の意義の差異を際立たせ、それが両構文の相違性や類犠牲性を説明できないか検討する。指導には認知意味論の紹介が事前に必要ではあろう。

b'. 意味論：比較的伝統的な立場で、より深く、厳密に類犠牲性を追及することで両構文の違いと原因を探る。その過程の中で連語ではなく、熟語構文として扱うべきとなる可能性もある。

c. 英語史・語彙史：文献や参考書において、両構文の扱いは、傾向としては昔の資料ほど同一に扱いがちで、最近の資料は両構文の意味を（近いページで扱うが）独立的に見ている（ただし電子辞書で串刺し検索してみると未だ同義とみる辞書もあるようだ）。分析が進んだため、両構文を区分する傾向が強まったとみるのが妥当とは思われるが、実は実際に意味変化が進み、かつては同義であったのが現代英語では異義となっている可能性もある。これを最近のコーパスやネットを利用して調査する。この観点では両構文（のいずれかないし双方）を熟語扱いすることとなろう。

d. 並行的考察：傍証ないし、並行的・発展的考察としてやはり*if*と*though*とを用いた*as if*と*as though*を扱い、*if*や*though*の特性を更に検討する。かなりの部分までパラレルに扱えるはずであるので受講生が取り組みやすく、かつその中でaのスタンスへの問題ないし補強例も見えてくる可能性がある。

この他にも、横断的に（つまり上記a～dとの）組み合わせが可能な観点として、*ア*及び*ビ*も挙げられよう：

ア．対象事例の範囲を変える：基本的に両構文が異なる意味を示している事例以外の検討対象としては、「*even if*が*even though*と実質的に同義となり、表面上共に*even though*の意味となる」場合に限っていた。がそれを変更する。例えば逆の、「*even though*が*even if*と実質的に同義となり、表面上共に*even if*の意味となる」場合を含める。更にはこちらを基本に分析を進めるという観点もありえよう。つまり前節3.3の立場を導入ないし重視する形で、広範囲にわたる説明力を検討するというものである。

イ．社会言語学・方言等：この観点は代替案、反論というよりは発展に属すると思われる。Kはコーパスも利用した研究であるが、多少とも古いので、最近のコーパスを使って最近のデータを調べさせるといことも有益だろう。前節3.4で述べたように、英語・米語の相違を調べさせ、それを踏まえて検討をすることでKの追証や反証を図ることも可能となろう。コーパスのデータ元次第では、英語母語話者以外のデータも得られ、いわゆる昨今で言う世界の英語（world Englishes）の観点からの検討も可能となろう。なお、世界の英語の有り様から、現実には両構文を同義で扱う傾向にあるのか、異義に捉える傾向があるのかも見えてくる可能性があるが、結果次第では英語教育にも貢献するデータや知見が得られる可能性もあろう。

「英文法」時にきちんと修得させておくことで、以上以外にも色々なスタンスがあり得よう。また、アクティブ・ラーニングでのやり方にしてもバリエーションを増やしていき、更なる学修効果を図ることができると思われる。

5. おわりに

以上、学問的知見をいかに授業に反映するか、授業間の断層を埋め、いかに連続性をもたせるか、という観点から考察した。授業運営の都合上先に開講されることが多いであろう「英文法」からはじめ、「英語学」や更にそれ以降（ゼミ等）へとつなげていくことで、時に隔たりの大きい学問と学修との差を縮める一助にはなったのではないかと思う。

より具体的には、説明手段・レベルや説明時間に限定が多い「英文法」において、さまざまな理由で「例外（熟語）故、同じに見えることも異なって見えることもある」という学修効果の期待できない説明で終わりがちな項目を例にとった。このような安易な説明でよとすることがあれば、それ以上の発展は期待できず、連続性は期待できないであろう。が、本論稿で提示した説明（上記（5））を「英文法」できちんと理解させ、それを踏まえて段階的展開を行う場合、一方で「英語学」、英語学系ゼミ、学問としての英語学等へと連結、発展させ得ると共に、他方で、あえて積極的に取り扱うことで、グループでの作業を通してアクティブ・ラーニングとして教授することも可能である、これらを示せたと思う。

今回の具体例は、*even if*文と*even though*文との対比というマイナーな事例を基にしているため、他への即効的な応用は難しい点もあるが、枠組みの骨子としては「英文法」で（「英語学」につながる）基礎の定着、「英語学」（以降）でその発展、ということであり、工夫次第で他のメジャーな事例全般に関しても適応を広げていけるのではないかと考える。今後、この路線

での事例を拡充していくことで、授業間の連携・連続性のみならず、それを踏まえた学問的知見へ導きを強化していきたい。

注

- 1) 本論稿では授業として開講される英文法を「英文法」、授業としての英語学を「英語学」とし、体系としての英文法や学問としての英語学一般・全般と区別する。
- 2) 本論稿では*even if*と*even though*を用いた文（文脈等も視野に入れていることから厳密には発話）を“構文”と呼ぶ。特に専門用語・言い回しになじみのない学生を前提とする「英文法」での適用を前提とした便宜上のことであり、両表現を熟語扱いする立場に立つわけではない。以降でわかるように、本論考では両者を合成論的に捉える故、Kjellmer (1989)と同様、コロケーション（全体の意味を足し算的に導出できる）の例とは見ても、熟語（全体の意味が部分の総和から成り立たない）とは見ない。
- 3) 本論稿での述べ方における「文脈上、従属節が真であることを示唆する表現」に関し、Kは(1a)では表現“verbally”が、(1b)では“must”がその役を担っているとしている。Kはこれらを*factual prompter*（真であると判断することを促すもの）と呼んでいるが、以下でも多少触れるように、少なくとも直感的に明瞭とは限らない場合もあり、「英語学」（及び英語学）において、特に学問的に議論の余地がある。
- 4) 上記注3で述べたように、Kのいう*prompter*（真に関して示唆する表現）であるかどうかわかりにくい。例えば、(2a)においてなぜ強調の“did”が*factual prompter*ではなく、*even if*を実質的に*even though*に変えな）いのかの疑問が残る。
- 5) Kjellmer (1989)は小西ら(1992)の『新英語学演習』に注釈つきで収録されており、専門分野の大学生用として発行されている。このことから、専門学科であれば、原著および小西らの注釈を直接「英語学」や更にはゼミで使用することも有益と考えられる。
- 6) 以降の記述からも明らかのように「英文法」の授業ではKの主張すべてを学生に提供することも控えるほうが良いと思われる（特に3.3参照）。緩用しての紹介方法でも、「英文法」としては学修効果を狙う点で充分だろうと思うが、学問的考察を深めるという点から、「英語学」ないし英語学系ゼミ等で原典を扱い、詳細に検討する価値はあると思う。
- 7) ただし例えば別の現象であるがメタファーの例でみると、“He is a dragon.”とあった場合、フィクションでもない限り、「実際に背中に羽があり空を飛べる」とか「実際に火を噴く」という所まで特性が顕在化しない。このような、状況次第で特性を抑制するような状況を考えると、譲歩節内容が真であるとの情報が抑制されうるならば*though*が*if*の意味と同様になり、*even though*が*even if*的になることもありえよう。

また、歴史的にあるいは方言や世界の英語（world Englishes）的に、(*if*が*though*の意味、ではなく）*though*が*if*の意味として使われる年代、地域等があり得ると仮定すると、*even though*が*even if*の代わりとなることも充分あり得ることとなる。この路線に関しては4節のA・I案も参照されたい。

主要参考文献

- Atlas, Jay David (2005) *Logic, Meaning, and Conversation: Semantical Underdeterminacy, Implicature, and their Interface*. Oxford University Press.
- Blakemore, Diane (1992) *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*. Blackwell.

- (武内・山崎 (訳) 『ひとは発話をどう理解するか』 ひつじ書房.)
- Carston, Robyn (2002) *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Blackwell. 『思考と発話：明示的伝達の語用論』 内田ら訳 (2008). 研究社.
- 石黒昭博 (2013) 『総合英語 Forest (7版)』 桐原書店.
- Jackendoff, Ray (1987) *Consciousness and the Computational Mind*. MIT Press.
- Kirkpatrick, Andy (2007) *World Englishes*. Cambridge University Press.
- Kjellmer, Goran (1989) "Even if and even though." *English Studies* 70.3, 256-269. (小西ら (1992) 収録)
- 小西友七 (編) (2006) 『現代英語語法辞典』 三省堂.
- 小西友七、菅山謙正 (編) (1992) 『新英語学演習』 英宝社.
- 久野すすむ、高見健一 (2013) 『謎解きの英文法 省略と倒置』 くろしお出版.
- Murphy, Raymond (2012) *English Grammar in Use (4th edition)*. Cambridge University Press.
- Quirk, Randolphら (1985) *A comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Recanati, François (2004) *Literal Meaning*. Cambridge University Press.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1995) *Relevance: Communication and Cognition (2nd edition)*. Blackwell.
- 山崎英一 (1991) "Even if conditionals: even and its relationship to the consequent." *Osaka Literary Review*, 30.